

バーン＝ジョーンズの学生時代と交友

デザイン学科

白石 和也

Burne-Jones: his Circle and School Days

Kazuya SHIRAIISHI

I

バーン＝ジョーンズのキング・エドワード校の中学生時代の学校教育では、先生の体罰や、生徒の弱い者いじめは当たり前のことだったことを前章で少し触れたが、生徒間のけんかについて、バーン＝ジョーンズが六十歳になって、1840年代の忘れがたい嫌な思い出をこのように助手のトマス・M. ルーク (ROOKE) に語っている。

「学校ではわしを物凄く憎んでいた奴がいて、下校するのを待伏せして、わしを転がし、足首をつかまえて、手押車のように手だけで歩かせて帰らせやがった。それがくる日もくる日もだったので、わしは彼を殺してやりたいほどだった。奴は退屈になってやっとなめたがね。その奴の乱暴が許せなくて、彼が家に訪ねてきたときなど、会ってもやらなかった。きっと根性も悪い奴と思ったからさ。けんかなんかは何時もあったが、わしはそれがとても嫌だった。ある日など、見るからに、でかい奴が授業中に紙片にく放課後にけりをつけようぜ>と書いた伝言を回してきた。その後の午前中の授業は、まったくの恐怖の状態に突っ込まれて、何をしたか分からなかった。そして放課後にわしと友だちは数人の悪がきに取り囲まれたので、わしはあの張本人にとっさに飛びかかってやったら、驚いたことに、奴は丸たん棒のように倒れやがった。でも後はまるでみじめだったよ」⁽¹⁾。

もっと忘れられない事件もあった。これもルークとの会話に出てきたことであるが、

「わしが学校で刺されたときのことだがね。一やった奴は、とにかくわしに猛烈に怒っていたようで、落度は確かわしの方にあつたと記憶しているが。一互いにとても憎んでいたからね。「ひどくやられたのですか?」。「かなりね。股の付け根で、危ないところだったよ。痛みはあまり感じなかったが、脚に何か暖かいものを感じたので、手をやって見たら、血のりだった。それから気分が悪くなって、気が遠くなり、先生の一人が、流しの馬車で家に連れて帰ってくれた。それがお祈りの時間中だったので、校長のところへは勿論行かなかったし、わしも言わなかった。男の子は言うものではないのでね。それから医者 came たけど親父には言わないことにしてくれたさ。一週間は家で休んだがね」⁽²⁾。

これらはみな1840年代の、拡張し続けていたバーミンガムでの出来事であった。ベネツ・ヒルだけは一応かなりきちんとした場所であったが、バーミンガムは産業革命の波に乗って急速に発展した復興都市で、美とおよそ縁遠いところで、人口は約220,000であったが、その四分の一ほどの人々の多くは、排水溝もなく、舗装もされていない200あまりの裏路地に、また少し離れた町はずれ

には、貧しいアイルランドの移民労働者たちが大勢住んでいた。1842年の記述によると、通りは町名の名折れで一雨につけ、天気につけても困りもので、町中の小道は村の畔道よりひどいもので、場末も遠く離れた所も、馬車道も人道のいずれの街路沿いも掘立小屋とぬかるみとたいして変らない光景であり、町の明りも暗がりより少しましなていどであったという。

1843年以降には市民の誇りが育って多少は改良されたとはいえ、バーン＝ジョーンズの心の底には貧しい人々の悲惨さが深く刻みこまれたようで、後に『オックスフォード・マガジン』の短編物語で彼は、夜ある町を若者が歩いていて貧しい人々の人生の哀しさに遭遇する場面を手にとるように生々しく描写している。

「あー、リチャードーなさけない、止めてー許してやって！子供が怪我するじゃないーあー！」。何と！天にも響き渡る、この叫びを聞いたのだろうか。雷鳴でも火でもなく、地面が裂けて呑み込まれたのでもない。母親はひどい一撃をよけようとして、倒れるそのはずみで、頭を窓枠の出っ張りにぶつけてしまったのだ。彼女は死んでしまった。その叫びがあまりにも強烈でつんざく金切声だったので、三、四人の男が酒場から出て来たが、みんな酔払っていて、壁に寄り掛かって立っているこの悪行をしでかした人非人と少しも変わらず、きたない言葉を意識もせずに罵っていた。間もなくして私（若者）は思わす女の傍らの雪に跪いているのに気付いた。それはほの暗い明りの揺らめきの下に見る残酷な光景であった。彼女の頬や口は血だらけであった。彼女は気を失って窒息したのだろう。私が彼女の頭を上げてやると、血が流れて私にも落ちてきた。私が抱き上げようとしたら帽子が下に落ち、彼女の長い髪の毛は踏みつけられた雪で濡れて真黒だった。悪態をつく卑劣な奴の意味不明の言葉を気にも留めなかったが、私の方へ千鳥足でやってくるのが分かって、様子がいっそう暗くなった。あの愚かで間抜けな仲間たちが彼を連れて帰るといった、彼らのせいぜい

できる最善なことをしている最中に私は・・・何かを、一両手で、抱くような反動、つまり赤ん坊を庇う仕草を感じたような気がした。「おい君、どうしたのさ。酔払った女と思うがね」、「あ、お巡りさん 一下の方を見て ーこの幼子を」。巡査は立ち止まって、赤ん坊をゆっくりと取り上げた。「赤ん坊は死んでる。まったくだ。でもまだ冷たくなっていない。母親が転んだときに殺したのかも」、「いや、いや、そんなことはない。むこうのあの男、あの旦那が殴り倒したからですよ」。自分の顔には恐怖の色が現われているのが分かったが、巡査の答える声には、こうした場にはなれっこだ、というような調子がうかがえた。「まあ、かわいそうだが、いつも起きてることだ、ほとんど毎晩にね」。「彼女の面倒を頼みます。今夜はせめて屋根の下で、そしてあの卑劣な奴らから保護してやってください」と言って、私はお金を巡査に渡してその場を立ち去った⁽³⁾。

バーン＝ジョーンズのこの物語の一場面は、話の流れで誇張があることは確かで、ディケンズやウォルター・スコット、シャーロット・M. ヨングたちの作品にあるメロドラマ的な主題や雰囲気があることも否めない。そしてバーン＝ジョーンズが若い頃にこの類いの子殺しを目にしていたと決めつけるのは、恐らく行き過ぎであろうが、この状態が文芸だけで知りえたことで書いたのではないことが示唆されるであろう。

バーン＝ジョーンズの中学校時代はこのような陰惨なイメージばかりでは決してなかった。彼のユーモアや悪戯、あるいは先生たちのカリカチュアが友人たちを楽しませた伝説めいた話も残っている。また、彼自身の素描は表現の手段として確かに必要であったが、それは依然として様式が時流のと少しも変わらず、その処理の仕方も楽しくなそうであった。しかし彼が描き、彩色した地図は違っていた。彼は学校でそのもっばらの人気があり、それらの隅々には自由さや楽しみがはつきりとうかがえた。ディクソンは「私は数学が苦手ですそれが上級に行く邪魔になった。しかし数学の

イエイツ先生の情状酌量のお陰でやっと思行けたのだ。バーン＝ジョーンズにも同じ問題があったようであった。数学の先生の二人の生徒に対する酌量の原因になった評価は、どうもエドワードが微細に書き込んで彩色した地図をイエイツ先生に提供したことによるようで、それを先生が長く保存して友人たちに見せていたことから分る」と述べている。

1848年にバーン＝ジョーンズは歴史研究の一助として描画を学ぶことにして、週三晩は地元の国立のデザイン学校に通いだした。彼にとって描画はもはや楽しみのために描くのではなく、もっと本格的に自分の才能を確かめる必要に迫られたためであった。しかし始まって六年目になる。この種の学校の描画の授業内容は、基礎を強調して創造的な面をあまり認めないのが典型であったようで、そのカリキュラムはほぼ以下のようである。

第一部 基本の指導。

1. フリーハンドの輪郭と幾何学的な形体の素描、及びチョークを使った陰影づけなど。骨格、比例、あるいは風景を含む、立体や自然物の描写。
2. 古代美術や自然物の立体描写や陰影による奥行表現。
3. 濃厚絵具（ペンキなど）と、限定された油絵具、染料、水彩絵具を含めた色彩指導。彩色画の描写と風景の彩色。
4. 用器画。

第二部

1. 装飾美術の歴史と原理、及び実習の指導。この中には従って古代、中世、近代の美術様式の講義が含まれる。

第三部

多様な製造過程と工業の各部門の研究やデザイン実習を含む製造工業におけるデザインの指導。

バーン＝ジョーンズが少なくともこの最初の第一部の基本指導に応じた証拠はジョージアナ・バーン＝ジョーンズ著『バーン＝ジョーンズの回想』にうかがえる。「・・・手際よい自家製の帳面

に・・・三原色、二次色、三次色など図表と共に明暗の原理に関するレッスンや練習問題をていねいに写したところがある」¹¹⁾と記している。

バーン＝ジョーンズは子供の頃から呼吸器系があまり丈夫でなく、たびたび病気になることがあった。それで空気の澄んだ郊外に行くように勧められた。彼のハリス・ブリッジでの毎年の滞在は、叔父のカサウッドが夏の休暇中にロンドンで過すべきでないと言主張しだしたことに始る。しかしその前に農場に滞在していたある日、彼はチャーウッド・フォレストにあるシトー会派の修道院を訪れた。そこで見た修道院の生活様式が静穏で印象深く、神秘的な理想への敬虔な祈りが僧侶に具現されているように感じ、大いに惹きつけられた。またピュージンのその建築も彼には夢にまで見た中世的精神の生まれ変りに思えた。それはバーミンガムで彼の周辺で見た世界の醜悪さと混乱とはうって変わったものであった。神や天使たちを心の友として田園的美しさのまっただ中に住むことに献身できると思ったからである。彼は現世から何か隔絶された良質の生活を図像で捉えたい気持ちに駆られた。この時期に彼は聖職者になることを真剣に心に留め、彼自身が修道院に入ろうと思うことさえあった。厳しいプロテスタントの背景がある彼の育った環境では、この考えが暇つぶしの夢であることも彼には分っていた。しかしこの一内気で希望に満ちた彼の考えは、高等な精神と憂鬱な雰囲気とロマンチックな大志を抱いた少年らしい混乱そのものであった。

バーン＝ジョーンズは自分の世界に閉じこもることで、学校生活の厳格さにも耐えようとしたことはすでに述べたが、そのさいに修道院が彼に与えた印象はいかに誇張しても過ぎることはないほどである。その場所を彼が休暇中に再び見たかどうかは確かでないが、それへの彼の思いは生涯を通して離れなかった。その日に彼がそこで見たと思った安息と平穏への憧れが彼の魂の奥に流れていることは誰にも分かった。それを隠すことはしなかったし、それ以来、少しずつ彼に付きまとうようになった夢、つまりすべての物や人とも別

れ、その扉の中に閉じこもろうとした夢を、彼は晩年になって話すことが多かった。

オックスフォード運動を進めていたニューマン枢機卿の説教のことを彼が聞いたのは授業でなく、足繁く通った多分ヘリフォード大聖堂であろう。枢機卿が彼に深く影響したことは少なくとも30年後に親しい友人に書いた以下の彼の言葉にうかがえる。「私が十五、六歳の頃に彼 [ニューマン] は実に多くのことを教えてくれた—それを今なお心に留めて忘れることができない。ソファークッションのこの時代に彼は、快適さに無頓着になり、そして物質主義の時代に取って代わるべきはすべての目に見えないものであることを教えてくれた。それが私の人生の初期に非常に深く印象づけられ、オックスフォードへ行く前に本当に良い防御装備が揃ってよかった。もしこの世がお金や贅沢、すなわちその見かけ倒しの宝物の家なんかで私を誘惑できないとすれば、—いや出来ないはず—叱るでもなし、禁止するでもなく、強引でもない方法で—いつも私より一歩前を歩いて導いてくれ、私を感激させたお陰だといってよい。いわば彼は私にとっての偉大なイメージか、あるいは決して卑下することのない象徴であったのだ。夢でないすべてのものを潔く退け、誰でも不首尾に終るかも知れないと分かっている、この世の人生のすべてを彼がある素晴らしい冒険にたとえてくれたのである」⁽⁵⁾。

バーン＝ジョーンズは過度に道徳的というわけではなかったが、彼の育ったのは十九世紀のイギリスの中産階級のプロテスタントが中心であった世界で、彼はその雰囲気から神経質過ぎて、彼らの感情に影響されすぎていた。彼にはそれと異なった教会で話される慰めの言葉が必要であった。彼は影響された宗教とは別の動機、すなわち道徳的概念を満足させてくれる希望をニューマンの言葉に見出したのである。彼の美しいものへの熱望が良いことへの熱望と一致したのである。彼は正統派の宗教がすべての善良さの根源であり、いわば道徳的規律へ使わされた守護神と思えるようになった。そのなかで美的センスが求められることで

も教会に惹きつけられた。礼拝が美しい言葉や美しい建物の中で行なわれるからであった。その美は中世的なもので、オックスフォード運動も言い換えれば中世へ遡ることにあり、彼が教会を好んだ道理がそこにもあった。こうしてそこで指導的な人物であったニューマン枢機卿は彼の想像力が求める英雄の一人になった。

バーン＝ジョーンズは陽気な外見に似合わず、悲しくなることも多かった。彼の寂しい子供時代とあいまって、とりわけ神経質な素性は人生への深いところでの恐怖を育み、思春期の不安感を増大させた。哀しい雰囲気が彼を突然に襲うこともあったので、それを克服しようと宗教に依存しようとしたことも考えられる。級友であったカノン・ディクソンの思い出の助けを借りると「彼は若い時代にはあまり幸福そうでなかった。学校では機嫌が良く、騒がしいかユーモラスかであったのは表面的で、内面では哀しさがあつたようだ。しかし彼の性質は熱しやすく、むしろ激しかった・・・だが、友だちには非常に優しく、努力もよくしたし、多くの賞をもらった。商業部にいた頃に彼が腕いっぱい賞状をもらって帰ったのを憶えている」⁽⁶⁾。

彼はまたいつも小さな子供のよう、筋肉を使い果し、今日は死にそうでも、明日は元気いっぱいになるといった性格であった。ディクソンはバーン＝ジョーンズが家にいるときのことも知っていた。「私は、彼がいつも家の中心にあり、友だちに家に遊びにこないか、と誘って自分の好きなようにできるので羨ましかった。それは（大家族の）私には問題外のことであった・・・彼はまた生徒の分際でもいつもお金を持っており、持っている物も立派だった」⁽⁷⁾。

上級組では生徒たちが現実の生活や宗教や政治にも注目するようになって自由に論議もされたし、個性が効力を発揮しだす。バーン＝ジョーンズのこの時期の人生を振り返ってみると、彼にとって卓越した興味の対象となるのはキリスト教の教会史と現代におけるその実情と結びつく宗教であった。彼の想像力は周辺に見えるほとんどすべてに

よって拒絶されたが、彼の崇拜の勢いは莫大であった。所属の教会では美しい儀式と荘厳な聖務日課をとり行なうことを主張する運動が起こりだしていた。この運動がいうまでもなく彼の深い共感を集め、その当時の国家権力との衝突にまで発展した宗教運動が彼を非常に刺激し、その闘争に自分の身も投げようと決心したくらいであった。

上級生たちの間では、国中に論争の嵐を巻き起こした有名な「ゴラム論争」に代表される闘争に従って宗教への大変な関心が集った。それはジョージ＝コーンリウス・ゴラム（1788－1857）が1847年に大法官によってエクセター教区の司祭に任命されたが、そこの主教であるH. フィルボッツが洗礼による新生の教理を不健全としてゴラムの正当性に疑いを持って就任を拒絶したのでゴラムは枢密院に上訴し、教理に反しないという判決が下されたものの、それが教会への国権の介入であると高教会主義者たちを怒らせ、論争の嵐を呼んだのである。それでも教主はゴラムの就任を拒んだため、彼は大主教のJ. B. サムナーから任命されることになったという事件であった。多くの上級生はその問題を深刻に感じ、一福音主義の方が遥かに多かったが一互いに分裂して、その問題に関して信念と感情が渦巻くなかで議論が沸騰した。エドワードの宗教的熱意は、失われつつあると思える大儀を守ろうとする少数派のリーダーとして彼を、恐らく生れつきの愛情からであろうが、積極的にさせ、その考えを強くするに至ったのであろう。

ともかくエドワードが上級に進めたのは1851年の後期で、ディクソンの一年後であった。ヒーリーはその頃、奨学金を獲得してケンブリッジのトリニティ・カレッジに行ったばかりであった。彼とエドワードとはそれほど個人的に親しくはなかったし、フルフォードもほとんど知らなかったが、彼は一学期早く奨学金を得てオックスフォードへ行った。しかしこの二、三年後に彼らが親しくなることを誰も予測できなかった。この当時カノン・ディクソンはメソジスト派であったので、反対側にいたに違いない。ヒーリーとマクドナルド

もやはりメソジスト派の家族であったので、その宗派の礼拝に出席していた。しかしディクソンとエドワードの両方がギフォード博士の所へ日曜の午後にギリシア聖書の講義のために一緒に行ったさいは、出席者たちが自由であった。しかしその講義が終わるとニュー・ストリートの坂を行ったり来たり歩きながら話や議論を続けた。エドワードは特に「自分のグループにはそれ以外の関係のない生徒もいたし、いささか馬鹿げている」と少々考えざるをえず、自分の見解の優位を友だちに誇りたくてしかたがなかった。宗教的「経験」や宗教的信仰の主題について彼は何も言わなかったが、他の人々があまりにも厳格かつ自信ありげにそれを表すと思われる意見に彼はショックさえ受けた。

メソジスト派は劇場へ行かないことを知ってか、無意識にか、バーン＝ジョーンズがディクソンをそこへ誘ったときの話がある。約束をしたがディクソンの母親は決心の堅いたいした人物で、かなりの学問もある人であったが、演劇というのは邪悪だと見做していた。誘われたことが彼の母親には嬉しくないことであって、息子が心配だったので、行くなら自分もついて行くと叱咤することになった。「お母さんが私について来たいといったのには、固執しなかった」とディクソンは穏やかに書いているが、他から聞いたところによると、若者二人が平靜かどうかを見て一緒に立ち去る息子を見送るつもりで、エドワードと落合う場所までは一緒に歩いて行ったということである。

1850年の秋にウェズレーのメソジスト教徒の例会でジョージ・ブラウン・マクドナルドという牧師がバーミンガムの「巡回教区」へ任命された。過去三年間彼はハッターズフィールドにいたが、その協会の定めで牧師は同じ教区にそれ以上長く留ってははいけなかった。この定めは牧師たちの家族には重荷であった。Conference Stationing Committee（協議会配置委員会）の作成するリストは牧師たち自身だけでなく、好むと好まざるにかかわらず、その決定に従って南北東西どこにでも行かなければならないその所帯にとっても、どうな

るかが心配であった。今回の事例では「バーミンガム」の評決が満足なものであった。そのわけは、たとえば九年後でも同じ巡回区へは戻れないのが普通であったのに、マクドナルドはかつて住んでいた馴染みの旧友がいる市へ転任できたからであった。バーミンガムでの最初の滞在では、彼らがベネッツ・ヒルの近くに住むことになったが、・・・今度はバーミンガムの他の場所になったので二つの家族は互いに知るよしもなかった。ところがマクドナルド師は長男のハリーをシェフィールドのウェズレー・カレッジから、一緒に家に住まわせてキング・エドワード校に通わせたのである。その学校に直ちに入学許可され、コーメル・ブライスと同じ学級に入れられた。これが彼自身のことよりは、彼の妹たちにとって重要になる。

ウィルフレッド・ヒーリーについては、エドワードの古典部の新しい友だちであることはすでに述べた。ヒーリーの両親はバーミンガムでの旧友であり、また会えることを楽しみにしていたし、両方の子供たちも以心伝心で互いに好感を持っていた。ヒーリーはマクドナルド家へしばしば遊びに来て、間もなくしてジョージアナの兄（ハリー）の特別に親しい友人になり、下の子供たちにも注目するようになった。彼は脊の高い青年で当時の流行でまだ背広を着ていた。彼の話はいつも機知に富み親切であったが、内気で大男のぎこちなさから、少女たちに非常に甘くなる犠牲を払わされた。彼はいつでも書くことに一番優れていたようで、それがまた彼にも楽しいことが分かって、自分も楽しむと同時に少女たちにも学校で短い手紙を書き、兄を郵便配達にして妹たちの誰かに送ったのである。この時代の少女たちは教育の機会が少なかったので、彼の言ったことや書いたことが彼女たちの世界を新しく明るくすることになった。少女たちは通常のカヴァネス（女家庭教師）に任せられることがあっても、このような形では新鮮な考えが届かなかった。それに対して、ウィルフレッドの話は少女たちが知っていたこととみな異なっていたので、彼にとって当然と分かっていた

ことでも、彼女たちの好奇心は刺激された。マクドナルドの父親は書物の愛好者であり、また学究でもあったので、息子の勉強の有力な助けになったが、娘たちを指図までする時間はなかった。というのも、ほとんど毎週説教の約束を履行するために家から離れることになり、日曜日は自分の教会の礼拝をしなければならなかったからである。引越しのさいに彼の千冊あまりの書物を一緒に持って行くために三年毎に母親がていねいに包装した。しかしその大部分は神に関する著作で、娘たちではなかった。彼女たちが自由に拾い読みしたのは、アルミニウス派やメソジスト派の初期に刊行された雑誌や『エジンバラ・リヴュー』などであった。シェイクスピアは禁止され、イギリスの宗教詩人のクウォールズ著『象徴』（1635）や『天路遍歴』ならいつも手にすることができた。『ロビンフッドのバラッド』は本棚の底から探し出せた。グリムの家庭御伽噺は外から送ってきて、御伽の国は自由であったが、計画的な読書については何も知らなかった。聖書は毎朝のお祈りに声を出して読み上げ、父親が壇上で説教するのを聞いた。宗教的な話は母親に任された。このように父親は大いに浮世離れしていた。大家族をしっかりと指図するのは、病弱だったが母親の役であり、留守がちの父親のために日常的にあくせくする点では彼女は未亡人並みであった。その難義を一言も子供たちに言ったことはないし、彼らは裕福とも貧乏とも思うことが決してなかった。

ジョージアナの兄がキング・エドワード校に入ってから三か月すると、フルフォードはオックスフォードへ行った。彼はヒーリーの友人ではあったが、その次年にハリーも彼もエドワードも同級生になった。エドワードがその学校の最後の学年にいて、ありとあらゆる方向に熱心になっている間に、フルフォードには新しい知り合いが（恐らくはコンプトンを通じて）できたが、その人物の当時の彼への影響は非常に際だったものであった。その知り合いとはバーミンガム校の卒業生で、1846年にオックスフォードのペンブルック・カレッジに入学許可されたJ. W. コルディコット氏であった。

彼は後にブリストル・グラマー・スクールの校長を長年務めたが、エドワードが最初に会った時の彼は、愉快で頭脳明晰な人物で、議論において明敏かつ明察の才に長けていた。エドワードは彼が非常に好きで、論争者としての巧みさにしばらくは惹きつけられた。エドワードが論理学の勉強に心身共に夢中になったのもコルデイコット氏の影響であり、エドワードは入学許可されてオックスフォードで寄宿するまでの間に論理学と形而上学に「そうとうな熱情」を傾けたという。同時に哲学と宗教における反論も広範に読んだようで、プライスによると、オックスフォードで必要なこれらの分野の読書をバーン＝ジョーンズは行く前からすべて完了していたという。

カノン・デイクスンが「彼（バーン＝ジョーンズ）の書物は他の生徒のより要領を得たもので、やはり高尚なものであった。彼は細かくノートをとってファイルする方法を心得ていたし『ラテン詩人大全 Corpus Poetarum Latinorum』を授業に持って来たり、別の機会には『ギリシア演劇詩人集 Poetae Scenici Graeci』などをよく持って来たが、私は羨ましく思うことが多かった。それも彼が理解力に優れた精神を示したからである。彼はまた「私の興味を惹く彫版が載っているイギリスのバラッド集を持っていたが、それに彼自身が描いた絵があった・・・私は彼にある時、魔法使いを信じるかい、と聞いたことがあるが、いかにも彼らしくそれをやってみたいな」と答えたのだ・・・」と学生時代についてデイクスンが述べている。また彼は学校の図書館についても述べているが、1851年の図書目録にはエドワードがいつも好んだ本が何冊もあった。レアード著の『ニネヴェ』の本、カトリン著の『インド』の本、カーゾン著の『レヴァントの修道院』の本、ロックハード著の『スコット』の本などが挙げられる。シェイクスピア、コルリッジ、バイロン、スコットなどのイギリス詩人たちの作品を、早くから彼が知っていて多く読んだことは確かである。その図書館での「至福な時間」に彼はデイクスンからキーツのことを多分、最初に聞いたのであろう。

テニソンの詩集や彼の『追憶の詩 In Memoriam』も目録にあったが、エドワードはオックスフォードへ行ってモリスからそれを貰うまでは所持していなかったから、授業で写しとって多分読んだのであろう。レーン著の『アラビア物語』も自分では持つてはいなかったが、彼が好きで逃せないものであった。彼の所有した書物には演劇物はどんな形式のものもなかったし、彼の考えでは語りかける物語であって、中年の頃にも演劇物を読むことなどほとんど考えられなかったという。小説家のなかでもスコットとディケンズが彼の最初の英雄で、サッカーは後になって崇めた。フンボルト著『宇宙および地球誌 Cosmos and Views of Nature』を読んで、彼は想像力を逞しくして広大な計画を論じたようである。天文学も彼を非常に惹きつけた。このようにおよそ現実離れした読書をしたのである。しかしこれらの広範な読書により、次第に彼が該博な知識と些細なことも疎んじない探求心をつちかい、彼の芸術活動に直接つながる研鑽の土台を築いたことは確かである。

ロンドンを夏に訪れるのは定期的に続き、エドワードと叔母との間の愛情は一層深まって、エドワードは彼女の人生で他の誰よりも息子に近い存在になりつつあった。彼が滞在していたさいに、義理の兄になるフレデリック・カサウッド氏がその時にイギリスにたまたま帰っていた。彼は古物研究者で地理学者で図面を描くのも巧みで、エドワードは直ちに感動してしまった。彼は若い頃から歩き回って、レバノン東部のシリアの古代都市の太陽神の神殿遺蹟があるカルナック神殿もバールベックも訪れたことがあるし、変装してエルサレムのオマーの回教寺院にも入る危険をおかしたこともあったという。エドワードは深い彼の中央アメリカでの探険や、廃墟になった文明の遺跡で描いた線画などに興味をそそられた。しかし彼は次の年にアメリカの汽船「アークティック」号がフランスの「ヴェスタ」号とニューファウンドランド（カナダ東岸の島）の沖合で衝突して沈んだ事故で亡くなった。

エドワードの父親は1851年の年末近くに、新鮮

な空気を吸って仕事場へ往復することで毎日の運動を行なうために、広い街道だがすぐに田舎に通じるブリストル・ロードの家を借りることになった。ベネツ・ヒルの家の二階は事務所に貸して、階下の工房とショールームだけを前のままにしておいた。ブリストル・ロードのポプラ・プレイス1番地の家は小さかったが適当な大きさの庭があり、これが田舎で生れたサンプスンさんには大変な喜びであった。しかしまったくの田舎というわけではなく、郊外暮しであって、その家で暮すには、その小さな家の一部を「独身の男性」に貸さねばならなかったのが、エドワードの書斎はなかった。彼は父親の部屋で狭いベッドで依然として寝るのであった。クリスマスの日にはいつも一緒に自分の家で過したが、必ず一人ではなかった。彼らがプライス家に行ったり、彼らが来たりであったが、エドワードの誕生日にも集った。可能なさいに二家族は集まることがよくあった。この年のクリスマス後の休暇の一部をバーン＝ジョーンズはヘリフォードで過したが、その時の1852年1月24日付けのプライス宛の手紙がそこで彼がいかに楽しく過ごしたかを明らかにしてくれる。

カラクタクスの国、ワイ川の堤防にて 親愛なるクロム（コーメル・プライス）へ

やくざな、もっと早く手紙を書けよ。ここで僕は、詩情あふれる見事な描写力で書いた長めの、歯切れ良い君の遍歴の歌い出しを期待していたのだぞ。その前に、俺の目の前の「ケチな」事情をきいてくれ。今度は俺が復讐される方だよな。もし君が俺の1/10,000,000ほどでも楽しんでいるのなら、君はエーリュシオン（英雄が死後に住む極楽）にいるようなもんだ。

今毛布から俺が姿を表したら、太陽が顔を出したばかりで、雪を被ったウェールズの彼方の丘、それから曲がりくねって流れて来るワイ川が見えた。俺はすぐに服にくるまって見事な川土手を彷徨って、グリーン城を巡り、ロマンチックな発作に襲われたのだ。ウェールズ語を学ぶ時、一緒だったらなんて楽しんだらうと思った。それから部

屋を締切って朝食をう呑みした。これは九時頃だろう、その後の二時間は優雅な談話と読書（ギリシアの歴史家のツキジュデスではない）で過した、この頃になると大聖堂の時間だ。その一時間は天国にいた。あー、その時に君がいればなー！ 12-3時は想像の縁にあるようなとりわけロマンチックな田舎の窪地をそぞろ歩きした。3-4時は大聖堂、4-8時は食べたり談話したり、夕食やお茶の時間でつぶれた。それから俺の読書の時間だが、午前1-2時か3時まで、あるいはもっと遅くなっていたが、寝ようとは決して思えないのだ。パーティなどは嫌いだ、その二つは何か耐えた。バックス（酒の神）が何とか守ってくれたよ。女たちときたらーあー いまいますい。もの珍しげにじろじろ見るだろう、俺はまるで話のネタにされてしまうからさ。

それはそうと、ファステイ（ローマの年代記）はどうなっているんだ？ 俺は一行もまだやらないし、今は帰る予定もない。恐らく火曜日にはここを発つが、モールヴァン（イングランド西部）を通過して一時はウースターに着くだろう。そこの大聖堂を見ようかと思っている。もし俺に君が紳士であったら、興味ある長い手紙を送っただろう。ーだが、現状はこれだ。あばよ。

君の+カンタベリ主教より⁸⁾

彼が書いている場所に「カラクタクスの国」という名前を付けていることから、彼にとってその世界が伝説でいかに蘇ったかが分る。カラクタクスはBC50年頃にローマ軍に抵抗したブリトン人の族長である。輝くストラ（聖者の祭服）を着けた二人の人物の間に「汝ら、ついてき給え、未だ知られざる食肉あり」と書かれた黄金の祭壇を持って教会に入るのを死の直前の聖人が見たという話しに、聖杯物語の気配を感じさせられて彼は感激してしまったのであろう。ヘリフォードからは別の手紙もあるが日付がないものの、やはり満足した同様な印象を伝えるものであった。

ジョージアナとの出会い

ジョージアナ・マクドナルドの住いはハンズワース、テラスの「保育所」のなかにうまく配置されていた。エドワードがそこに最初に行ったのは1852年が初めてであった。コーメル・プライスも一緒に彼女の兄を訪問したのだった。それが何日であったかをジョージアナは憶えてないが、その彼らの訪問の時のことを忘れることはなかった。エドワードは十九歳だったが、彼はコートを着ていたこともあって、実際には身長が大人に見えた。また彼にはどこか大人びたところもあって、彼女は深く印象づけられた。「彼はとくに痩せているというほどではなかったが、背が高くすらりとした体づきで、肩幅が広がった。顔は金髪の人によくあるように、非常に色白で繊細にみえたが、病気とは感じられなかった。彼の髪は真っ直ぐで、褪せたような金髪で、目は（強いてその色を表すならば）淡い灰色であった。鼻のプロポーションはきわめて適当だが、その輪郭はユニークで、口は大きく、きちんとした形であった。上下の唇の様子には優しいやすらぎがあった。彼の頭の格好は鐘形様、額は広く穏やかにいささか生えあがっていて、両目の上の眉の引き具合が上品であった。彼が何かを話したり、聴いて動かされると目から力が発散するだけでなく、顔全体が内側から明るくなるように思えた。普通は控え目の様子であったが、何にもよく注意している印象があったので、上がっているわけでもなかった」¹⁹¹。

エドワードは三度ばかりマクドナルド家を訪問したが、「口を開くと美しい声で、話ぶりは速く明瞭で、単刀直入であった。最初に訪れたさいには三歳の小さな女の子を自分の膝の上に抱き上げて、しきりに可笑しな顔をして見せて姉たちをびっくりさせた。だが子供たちには慣れてないようで、子供が恐がったさいにはどうしてよいか分からず、彼のほうが驚いてしまった。次に来たさいには、兄も姉たちも留守で、子供のエプロンを着けていたジョージアナが彼の伝言を受けることになった。三回目には彼女の父がバーミンガムでの

任期を終えて、ロンドンへ引越すために、お別れの挨拶に訪れた時であった。この時に彼が興奮すると雄弁になることが分かった。このロンドンでの彼の最後の訪問の時であったと思われるが、誰かがある女性のことで「浮気」という言葉を口に出したさいに、彼の顔は突然に色めき、声を上げることはしなかったものの、とりわけおしゃべりになって「浮気は獣だ、それも悪い獣、いやな獣、邪悪でぞっとする獣、梟、鬼、蝙蝠、吸血鬼だ」とまくし立てたので皆がびっくりして座っていたら、いつもの彼の落ち着きが口もとに戻ったのである。彼女の兄によると彼は「女嫌い」だということであった。

ジョージアナはウィルフレッド・ヒーリーを通してフルフォードも同じ頃を知るようになった。一番下の女の子が彼をととても好きで、他の姉妹たちにも非常に優しくかった。彼女たちに詩を朗読してくれたのは彼が最初であって、詩の意味に熟を込めて読む彼の声も見事であった。彼女がこの上なく感謝の気持になったのは、彼の最高の英雄であるテニソンの作品を紹介する前に、彼が先ずロングフェローで耳を楽しませてくれ、次第に彼女たちを感謝の発露に応じる体制へ多少とも導いてくれたことであった。彼自身が詩を書いても良いと思えるくらいに感情が豊かであったし、音楽も好きで、ベートーヴェンやメンデルスゾーン作品についても彼女たちに教えてくれた。彼は脊が高くなくずんぐりして頑丈そうであったが、衣服に非常に気を使っていた。美男子の方ではないが、機嫌のよいときは喜びの表情が満面に現れ、笑うと非常に愛敬があった。

1852年の前「半」に学校設立三百年記念の祭典のために幾つかの賞が卒業生たちによって提供された。論文の出題の一つはエドワードVI世時代のイギリスの文学状況についてであった。それにエドワードとディクソンと一緒に応募したのであるが、第一位はディクソンが取り、二位については、エドワードとヴァレンタインという名の生徒が同位になった。カノン・ディクソンはその時のことが多年過ぎてなおも興味新しく、敬虚な気持でこ

のように述べている。「あの三百年記念行事は私たちにとって、ひいてはバーミンガムにとって晴れがましい日だった」。ディクスン自身はこの年に何回目かのイギリス詩の年間賞を獲得していた。エドワードとヴァレンタインの間には別の「つながり」もあった。つまり奨学金のことであるが、その決定が長々と遅れて、一試験実施者たちがオックスフォードに紹介し、それからオックスフォードがまたバーミンガムに書類を送り帰したので、ついにヴァレンタインに優位が与えられた時には、エドワードの父が自費で息子をオックスフォードへやる決心をしていたので、エドワードの入学許可はすでに行なわれていた。

キング・エドワード校はケンブリッジにおいて際立って有名な伝統があって、ペンブルックに行く者はほとんどなく、オックスフォード大学を選ぶのであった。それはその先生がバーミンガム・スクールの校長であったジェーン博士であったからだったが、エドワードの名前はすでにエクセターに記名されていて、1852年6月1日に入学手続をすることになっていた。彼の友人のコルディコット氏がオックスフォードで歓迎してくれて、エドワードにはそこがもはや見知らぬ土地でないような雰囲気が出たという。

オックスフォードの第一印象

バーン＝ジョーンズは1852年6月1日にオックスフォード大学エクセター・カレッジの講堂で入学試験をうけるが、その隣の席にいたのがウィリアム・モリスであった。その試験の最初の日が終って彼は父親に短い手紙を書いたが、部屋内での淋しい不安なイメージはその試験と共になくなってしまっただけで、彼が胸をわくわくさせる様子を読みにくい手書き文字のすべての語に手に取るように感じられる。コルディコット氏の部屋からの日付になっている。

父上

火曜日夜

私は多くを述べる暇がありません。・・・コル

ディコット氏が私にとっても親切にしてくれました。アイシスに行って来ました。とても楽しかったです。しかし明日帰るのは無理で、一木曜日になるに違いないと思います。明日は入学する手続をしなければなりません。今日は9-4時まで学校にいました。明日帰って来る時間は分かりません。

オックスフォードは実に壮麗だった!!! 気候も素晴らしい。これ以上書くのはお許し下さい。今、仲間にホイスト(トランプ)を持たせてあるのです。

さようなら、息子より

エドワード・ジョーンズ¹⁰⁰

迎え入れてくれたこの手紙にある先輩、夢の実現、夏の夜とホイスト(トランプ)・テーブル、テムズ河上流のアイシスなどの地名、全体が彼の顔と同じく新参者の気持をはっきりと現している。学校での二日目にはすべての手続きが終って、作法も覚えた。バーン＝ジョーンズの入学許可の日付は1852年6月2日になっている。しかし学寮は満員状態で1853年の春学期まで入寮を延期せざるをえなかった。学期末から次の一月までは彼の自分の時間であった。

これ以後の数か月はプライスによると、いうまでもなく、一論理学、形而上学、哲学、宗教的論証法など、しかし堅い物だけでは城壁はできない(*durum et durum non facit murum*)ので、詩の本やロマン(物語)や信心などが彼の生活する家の高い壁の煉瓦を保つモルタルになった。友情や青春の歓喜や不安、作法や手段などの他のことでも彼は忙しかった。それから回復に数週間もかかった今までにない重い病気にもなった。

彼は病気から完全に回復していつもの健康を取り戻したが、健康状態はいつも、彼の精神に大いに左右された。彼のオックスフォードについての期待は大きく、熱心な雰囲気の中で自由に呼吸するようになった。新年がやって来たさいに彼はすでに準備を整え、1853年1月の中旬には希望の都市にいることを身体全体で感じていた。オックスフォードでバーン＝ジョーンズは想像もしてい

なかった多くを発見したが、彼が求めていたものは見つからなかった。つい最近まで宗教運動の中心であったその大学には、彼の選んだ人生の救いと力が用意されていると信じていたのである。ニューマン枢機卿の質素で高尚な勧告は彼の心の底に沁み込んで、その影響で彼は牧師になろうと決めたのであった。しかし彼にとってオックスフォードはまるで、彼が愛していた誰かが立ち去って、どこを見てもその友人の面影が浮かび上がってくるに過ぎない部屋のものであった。その運動はニューマンのイギリス国教会脱退に終わったからである。彼にはオックスフォードの生活自体が物憂く無頓着に思え、ついこの頃まであった燃えるような時間の跡形もほとんど感じられなかった。こうした失望のなかで彼は周囲を見回し、これまで求めてもいなかった精神の侘しさを感じていた。その時に生涯の友となるウィリアム・モリスが現れ、親しくなったのである。

二人は一年前に入学試験で隣合せて会ってはいしたが、バーン＝ジョーンズが彼を知るようになったのは、朝モリスがホラティウスのレポートを終えて表紙に「ウィリアム・モリス」と名前を書いて提出したからであった。カレッジの方で彼らを受け入れる部屋ができるまで、お互いに別れ別れに、最初の二学期間は外に下宿していたのである。この頃のオックスフォードは鉄道が敷かれるようになって、北の方からその建設が始って旧市街はすでに労働者たちの煉瓦づくりの家に取り囲まれつつあった。その他はまだ中世の町のたたずまいをそのまま残していた。「灰色屋根の家々と、くねくねした長い通りの景観、多くの鐘の響きが聞えた」という。彼はオックスフォードの印象をこう書いている。

「鉄道に接するところは別にして、この町は、どっちの方向に向って行っても、あたかも町の周囲にかつて壁が巡らされていたかのように、唐突にとぎれて、いきなり牧草地になる。この町の壁は煉瓦が少なく、灰色の石材か、もっと貧しい通りはペップル・ダッシュ（小石打込み仕上げ）の壁

面で黄色であるかの、どちらかであった。木彫の装飾や小さな彫像のある家がまだ散在している通りを歩き回することは、私たちに尽きぬ喜びだった。マートン・カレッジの礼拝堂はバターフィールドが改修したばかりで、マートンの前フェローであったポレンがその天井の装飾を担当した。私たちは午後の時間をその場所で過すことが多かった。実際、マートンの建物とニュー・カレッジの回廊こそは、オックスフォードでの私たちの中心的な聖堂であったと思う」¹¹¹。

しかしニューマンがローマ教会に迎え入れられるという衝撃的の事件があったから、オックスフォード運動で知られるアングロ・カトリックの復興運動の熱は、審美性の問題を除けば、バーン＝ジョーンズからもほとんど消え去っていた。彼は「こうした事柄に関してモリスと考えを述べ合い、昼間は怒りながら一緒に散歩し、晩は晩で、一緒に読書した」と言っている。とにかく最初の学期の経験は幻滅を感じさせるものであった。彼はモリスの最初の印象をこう書いている。

「初対面の時から、私には彼がこれまで会ったどんな人とも違っているのが分った。話ぶりには熱がこもっていたし、時には激越な口調にもなった。彼が物憂げだったり疲れていたりするところを見たことがない。あの頃の彼はすらりとした体型をしていた。髪の毛はダーク・ブラウンで非常に濃く生え、鼻筋が通り、目がはしばみ色。口元は至極繊細で美しかった」¹¹²。

マッケイルによると、エクセターの学生は「古典学やスコラ神学の細部に没頭する猛勉強家」と、それ以外の「主として舟遊びや狩猟や飲み食いに関心を持ち、不作法と不道徳に浸り切った……まったく不快で嘆かわしい」者たちに大別された。オックスフォードの町は外面的には品位が保たれていたが、その周辺の村々や、学監の管轄圏から離れているところでは、肉欲への沈溺や様々な賭博、金銭の浪費などの非行に走る機会が満ちあふ

れていた。

学生が馬を持つことは、自分の所属するカレッジの長から許可を得ないと禁じられていた。それは言いなりになる娘たちのいる周囲の村へ馬に乗って行くからであったが、貸し馬を借りるのは一行に構わなくて、他の非行よりはましだとして当局が見て見ぬふりをする場合が多かったという。バーン＝ジョーンズもモリスも乗馬好きだったが、二人はやましいことはなく、ゴシック建築の教会や、真鍮記念碑を見に行き、記念碑の拓本などをとって部屋に飾ったりした。

コーメル・プライスとの友情にとって楽しいお膳立てもできた。彼の両親がポプラ・プレイスから歩いて二・三分の所のウェスト・プロンウィッチに住むようになったのである。彼も教会に入るつもりであったが、大学に行く奨学資金に応募できるためにはバーミンガムに留っていなければならなかった。それでアッパー・サン・ストリートの小さな家を借りて、家事をするために妹たちがそこへやって来た。その一人であるグローヴ夫人によると、彼らの家はそこで間もなくしてちょっとした楽しい集り場所になった。フルフォード、ディクソン、マクドナルドたちその他が集合したのである。バーン＝ジョーンズは一行では一番明るく聡明であり、悪戯好きで人真似が見事で、笑いが豪快で椅子からころがり落ちることさえあった。彼は知っている多様な牧師の説教（ケイスボウ師のもその出し物の一つであった）の物真似はまさに上手という外はなく、その内容をいつも落として皆を笑わせた。あるいは彼とコーメルが 그리스とマリオをやることもあり、バーン＝ジョーンズが 그리스をやれば、それにコーメルがマリオであいずちを打って一行が笑い放題になることもあった。バーン＝ジョーンズは父親になった随分後にもこうした気分になることがあり、アトリエで絵を描いているさいに、突然叙唱調になって、華麗なイタリア風のブラヴァラ（熟練）様式で日常的な意見を娘に向けて言えば、彼の娘は等しく味気ない言葉をほとばしらせた感情の歌にして答え一大笑いになるまで、一緒に歌うことになった

りした。当時のロンドンの人気を独占していたギルバート＝サリヴァン・オペレッタは、まさにこの類いのものであり彼はこのような雰囲気を非常に楽しんだという。

エクセターでバーン＝ジョーンズが知っている人はモリス以外にたいしていなかった。友だちをつくる広い可能性はあったのだが、「・・・モリスと自分だけが友だちになれそうに思える。私たちはほとんど毎日のように一緒に散歩したが・・・二人が選んだカレッジがまずい地で、そこに降立ってしまったことが明らかになった。それでエクセターでは両方ともとても孤立してしまっていて、数週間経ってもカレッジ全体でさえも、話しかけたり訪ねたりするのは三人か四人しかいなかった。しかしペンブルック・カレッジの方にはバーミンガム出身者の集団があったので、二人だけでもの足りなくなってきたら、私たちはその連中とも付き合った」という。だがエクセター特有の同属嫌悪もあって、むしろペンブルック・カレッジのバーミンガム出身者以外の仲間たちと付き合うようになった。そこには次のような面々がいた。モリスの親友の一人及びモリス商会の提携者ともなる、数学者で優しく感受性の鋭いチャールズ・フォークナー、バーン＝ジョーンズの中学校時代の学友で後にカーライル大聖堂参事会員となる小詩人、ジェラルド・マンリー・ホプキンズの友人でもあったという R. W. ディクソン、そして人を圧倒するほどの座談の名手で、外見上ではグループ全体でとりわけ頭が切れるように感じられ、他よりは二歳ほど年上のウィリアム・フルフォードたちであった。バーン＝ジョーンズによると「集るのは、いつもフォークナーの部屋に決まっていた・・・夜九時頃に私はモリスを連れだっておらりとこの部屋を訪れ、一体どう考えるべきか決着がつくまで何でも論じ合った」という。後にこのグループにバーン＝ジョーンズがバーミンガムで一番親しくしていたコーメル・プライスも加わる。もしこうしてバーン＝ジョーンズがモリスをこのグループに引き入れなかったら、モリスもオックスフォードでの暮しが楽しめたかどう

かは疑わしいものであった。このグループのなかで間もなくして「兄弟団」を創設しようという動きが現れだし、後には数年前にすでに結成されていたラファエル前派兄弟団と計らずも張り合う結果になる。

兄弟団を作る予定が最初に示されたのは、当時オックスフォードに入る準備をしていたバーミンガムの学友宛にバーン＝ジョーンズが書いた1853年5月1日付の手紙においてである。この頃のオックスフォードではまだ、五月祭の朝にはモードリン・タワーで賛美歌を歌うだけでなく、呼び子や狩猟用の角笛を吹き鳴らすことも行なわれていた。この日は花火を使って騒ぐ習慣のあるガイ・フォークスの日（11月5日）の行事を思わせるほど騒々しいお祝が通りで繰り広げられて幕を閉じた。バーン＝ジョーンズはこう書いている。「夜の十時だ。てっぺんのディクソンの部屋から、たらいに汲んだ水を何杯か下の群衆めがけてぶちまけてきて、まったく面白かったよ。俺は兄弟団を作る決心をした。『ガラハッド卿』を暗唱できるようにしてくれ。この騎士に我等の修道会の守護聖人になってもらうつもりだからね。この計画には一人熱烈な賛同者がいるんだ」。これは多分モリスのことである。数か月後にバーン＝ジョーンズは「この時代に対して聖なる戦いを挑む十字軍に、君も入隊してもらわねばならない」と書いた。一年後にも同じ相手にこう書いた。「修道院設立の可能性が以前よりずっと高まってきた。いつかはできると思うんだが」。

しかしこの年の暮れまでに、修道院構想は、もっと差し迫った社会情勢に直面して、立ち消えになりかけた。イギリスの心臓部にたまっていた産業上の中心地にある汚穢と悲惨な話を携えてプライスとフォークナーがオックスフォードへやって来たのであった。コーメル・プライスは1840年代や1850年代のバーミンガムの事態が最悪だったとこのように書いている。

「職工や鉱夫を保護するものは何もなく 一娯楽
といえば、せいぜい懸賞拳闘試合、闘犬、闘鶏、

飲酒くらいである。子供の時に拳闘試合をずいぶん見たが、野蛮な光景だった。一度などボクサーが殺されたこともある。この国は全般的に地獄に向って進んでいた。バーミンガム・スクールで上級の男子生徒のかなりが、この時代のひどい害悪にはっきり気づいていた。・・・私たちはほぼ全員が通学生であり、学校まで近道して、衝撃的なほど汚く惨めなスラムから工業地帯へ5マイルほど歩いた時のことを思い出す。最後の3マイルの内に泥酔して地面に転がっている人の数を数えると30人、半数くらいがなんと女性だった」¹³。

ヴィクトリア朝の製造業の大勝利を誇示し、あの繁栄と平和の輝かしい時代の幕開けとなった水晶宮の、あの壮麗さの影に潜んでいたのがこの状態であった。バーン＝ジョーンズたちは産業のもたらすあらゆる脅威や時代の道徳的退廃に対する自分たちの運動を聖杯探究の準備とみなし、ガラハッド卿の体現する騎士道的理想を自らの指針としようとした。そして聖職に賭けた彼らの情熱は次第に中世のロマン（物語）文学への関心を高め、その神秘的で秘教的な世界に強く惹かれて行くことになった。また彼らの仲間たちがテニスンやエドガ・アラン・ポーのような同時代の詩人たちを熱狂的に賛美したのも、彼らの作品が中世に対する深い洞察に溢れていたからであったが、ラスキンはテニスンの詩の韻律が必ずしも正確でないという責めに対してこのように答えた。テニスンのスタイルの非常なる韻律の自由な要素はむしろ優れた魅力であり、特徴でもあるという見解である。それによって言葉を説明の表現手段とするだけでなく、いわば単独の語でない詩全体の連続そのものであり、言語の音韻効果を表す修辞法ともいべき声喩法であって、特質そのものを表していることで彼の力が大方は明らかになるというものであった。外見的な特質としても、飽満で飽き飽きするような均等さはその最善な解釈の自由を妨げることになる。だから「絶えず多様化する」のは詩のとりわけありふれた形容語句でもある。もし山脈の高さがみな同じで、まったく同じ円錐形で

あったり、田舎の道が全部直角に交差していたら、どう思うであろうか。言うまでもなく、嫌になるであろう。変化があることが自然であるなら、それを受入れねばならないということであった。

カノン・ディクソンによるとオックスフォード時代の初期にバーン＝ジョーンズはかなりの内面的変革を経験したという。バーン＝ジョーンズはモリスに会いにウォルサムストウに行ったが、二人は互いの家庭について話したことがなかったので、互いに友人が住んでいたのが、大きな家かそれとも小さな家か、についてもまったく知らなかったが、彼はモリスの家を見て、自分の家に比べてモリスの家が壮麗なものに思えた。モリスの父親はすでに亡くなっていたが、彼の母親がバーン＝ジョーンズを親切に歓迎してくれた。そしてモリスの子供時代の多くの話がなされたが、そのことでモリスがあまりにもいらいらして逸話は後に延期された。彼らは三日間ほど花壇のなかや、高い壁のなかの家庭菜園を歩き回りながら、あるいは中央にある大きな階段の広い踊場の、沢山な書物が整理されていた窓下の腰掛で読書したりして非常に楽しい日を過ごした。

この頃にはマクドナルド卿のバーミンガムでの任期は終り、彼の家族は次の任地のロンドンに行くことになり、子供たちはわくわくしていた。そこにバーン＝ジョーンズが別れの挨拶に訪れて来たときのことをジョージアナは忘れられなかった。彼女は兄を通じてバーン＝ジョーンズを知ったのだが、彼のように家で会った友人はいなかった。そして彼には長い期間をおいて稀にしか会えない、その間にも弱められることが決してなかった深い印象に彼女は胸をときめかし、ロンドンへ旅立つ出発駅のグレート・ウェスタン鉄道駅のトンネルの暗のなかを、彼女たちの乗っている汽車がゆっくりと通り過ぎるさいに、彼の住んでいる場所を離れる嘆きと悲しみをしみじみと感じたという。

1853年の秋学期にバーン＝ジョーンズとモリスはカレッジ内の部屋へ移った。モリスの部屋をエクセターの連中が「ヘル・クウォッド(地獄の院)」と呼びならわしていたのは、小さなクォドラング

ル(方庭を囲む建物)のなかにあったからである。その窓からは小さいが美しいフェロウズ・ガーデンやプレイズノウズ・レイン(小道)にまで広がる大きな栗の木やボドリー図書館の灰色の威容が見渡せた。ここでモリスは主として神学、教会史、聖書考古学の著作などをバーン＝ジョーンズに向かって朗読して聞かせた。この習慣は彼らの生涯に及んで続き、この頃にバーン＝ジョーンズが読んだ書物はオックスフォード運動の機関パンフレットの『時事叢書』、当時代のイギリスの神学者であるJ. M. ミルマン著の中世の年代記『東方教会史』(5巻)、同時代の歴史家で詩人であったH. H. ミルマン著『ローマのキリスト教』(6巻)、それに多少うしろめたい気持で読んだが、同時代にカトリックに改宗した著述家のケネルム・ディグビー著『カトリックの習慣』といった著書などであったが、バーン＝ジョーンズもモリスもほどなくしてローマ・カトリズムに共感を覚えて、実際はローマ・カトリックに改宗する瀬戸際まできていた。教会関係以外の読書でモリスが半ば歌うように奇妙な声で、韻を踏むところを過度に強勢して読み上げたのが「シャロット姫」であった。また1853年にはジョン・ラスキン著『ヴェネツィアの石』の第2巻が刊行され、ラスキンは彼らの英雄であると同時に予言者にもなった。また彼の『近代絵画論』は二人の聖典にもなった。彼らの評価でラスキンの次に来るのは、十二世紀と十九世紀を憤慨しつつ対照させたカーライル著『過去と現在』であった。彼らはまだマロリーを読んでいなかったが、モリスはアングロ・サクソン学者のソープ著『北欧神話』も読んで見た。バーン＝ジョーンズも事実上、マロリーの世界に移り住んでいた。また当時はまだ名画の複製というものが知られてなく、フケー著『ジントラム』の英訳本中にデューラーの『騎士と死神』の木版画を見出して興奮する二人であった。

注

1. Martin Harrison & Bill Waters “*Burne-Jones*”, Barries & Jenkins, 1973. p. 3.
2. Ibid.
3. Harrison & Waters, op. cit., p. 4
4. Harrison & Waters, op. cit., p. 5.
5. Georgiana Burne-Jones “*Memorials of Burne-Jones*”, Lund Humphries, 1993. vol. 1. p. 59.
6. Georgiana Burne-Jones, op. cit., p. 49.
7. Georgia Burne-Jones, op. cit., p. 50.
8. Harrison & Waters, op. cit., p. 7.
9. Georgiana Burne-Jones, op. cit., p. 65.
10. Georgiana Burne-Jones, op. cit., p. 68.
11. Philip Henderson “*William Morris: his life and Friends*”, Penguin Books, 1973. p. 26.
12. Henderson, op. cit., p. 28.
13. Henderson, op. cit., p. 40.